

Title	<寄稿>シンガポール スタディトリップを終えて
Author(s)	自主活動 英語議論会コーナーテーブル
Citation	公共空間：公共政策・実務の最前線を届ける情報誌 (2017), 2017 Summer (Vol. 16): 27-28
Issue Date	2017
URL	http://hdl.handle.net/2433/234574
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

シンガポール スタディトリップを終えて

自主活動 英語議論会コーナーテーブル

二〇一七年二月五日から十日、コーナーテーブルの有志メンバーは、シンガポールに行った。リークアンユー公共政策大学院（以下LK Y）との議論会及び在星行政機関・国際機関・民間企業等の訪問を行うためだ。詳細は、京大公共政策本大学院内設置の『アジア学生サミット2016』実施報告書」をご覧ください。



リークアンユー公共政策大学院校舎

今回は、京大公共を目指す方や活動に応援してくださった方に向けて、十一期竹中が、LK Y学生との交流で学んだことを述べ、企画リーダーの十期井上と北田は、いかにしてトリップが実現に至ったのかを語る。

「成長の場」

シンガポール・トリップ最終日、私には重要な役割が与えられていた。それは、LK Y学生の前での英語によるプレゼンテーションである。

十一期 竹中玲紀

英語でのプレゼンテーションは、コーナーテーブルに所属して以来、何度も経験してきたことであり、台湾に渡航した際にも国立台湾大学の大学院生の前でプレゼンテーションを行った。しかし、今回は社会人経験があり、かつほぼネイティブレベルで英語を話すLK Y学生の前でプレゼンテーションを行うということで、本番前は不安でいっぱいであった。大教室の中央に立ち、全員の視線を浴びながら非母国語で話すというのは、何度経験しても慣れることができないことのひとつである。

発表中、何度か言葉に詰まることはあったものの、無事プレゼンを終え、会場から拍手をいただけたときは、ほっと一安心することができた。しかし、安心したのも束の間で、その後はLK Y学生とのディスカッションが始まり、レベルの高い議論に頭をフル回転させながら必死についていかなければならなかった。三時間にもわたるディスカッションが終わったときは、疲労を感じたが、大きな達成感を味わうことができた。

プレゼンの二日前、私は中国人のLK Y学生にプレゼン資料のチェックを依頼していた。彼

女はプレゼン資料の一枚一枚を丁寧にチェックしてくれ、的確なアドバイスを与えてくれた。彼女に「最後の問題提起の文章であなたはWE」という主語を使っているけれど、このWEは中国人以外のみんなというニュアンスになっているわね。」と物腰柔らかに指摘され、なんとなくWEを使っていた私は、微妙なニュアンスの違いで相手に誤解を与えてしまうことに気づかされた。無神経に言葉を選んでいた私とは対照的に、LK Y学生の細かい気配りを感じた体験の一つである。

就職活動をしていると、よく「成長の場」という言葉を耳にする。おそらく誰しも自分が成長できるような環境を求めているのだろう。私にとっては、コーナーテーブルこそが「成長の場」であり、今回のシンガポール・トリップを通して、自分自身の成長を感じることができた。



議論会でのプレゼンの様子

企画リーダー対談「構想から実現に至るまで」

十期 井上雄貴・北田健人

北田…そもそも、「なんでシンガポールなの？」って話ですよ。ご存知の通り同国の成長は目覚ましい。その秘訣は人材にあり、彼らは社会で認められたいという向上心が恐ろしいほど強い。私はシンガポール・エリートの向上心と自分を比較したときに危機感を覚えました。彼らに少しでも追いつくヒントを得たいと思い、訪星を構想するに至りました。しかし、構想するだけでは実現できない。構想に耳を傾けて、実現に向け尽力してくれたのが井上です。

井上…私も北田君に共感しました。そこで私がカウンターパートとして目をつけたのが、LKYです。LKYには世界各国の省庁やNGOでの経験のある学生が多く、高い能力と公的マインドの持ち主が集まっています。彼らとの交流は我々の能力や価値観を相対化するとともに、



(左)井上雄貴 (右)北田健人

公共セクターを目指す京大公共の学生にとって国際的な人的ネットワーク構築に繋がると考え、LKYとの交流を目指しました。

北田…カウンターパー

トがLKYと決まって、私は、こちらが一方的にLKY学生から学ぶという姿勢だけではなく、「発信」する観点も重視するべきだと考えました。具現化したものの一つである「Kyoto Experience」は、京都の食文化を発信するプログラムです。LKYの学生に日本文化への理解を促すと同時に、私たちが自国文化を見つめ直す良い機会にもなりました。ところで、トリップに至るまでなかなか道は険しかったよね(笑)。でも井上の持ち前の行動力で構想も現実のものになっていったよね。

井上…そうだね(笑)。企画は二〇一六年春から着手し、実現まで半年以上の時間を費やしました。

まず全く繋がりのなかったLKYは、東大公共の友人を通じて繋がりました。東大公共はLKYと交換留学制度を設けており学生同士の関係も深かったからです。私は東京に向き、東大公共の学生に企画をプレゼンしました。その結果、LKYに留学している日本人学生を紹介してもらうことができました。

それ以降LKYの日本人留学生とメールでやりとりを進めていきましたが、LKYと京大公共のイベントは初開催ということもあり信頼関係作りに気を配りました。私は、大胆にも、二〇一六年十一月に実施した台湾でのイベント直

後にシンガポールに飛び、関係者と直に会うことで信頼関係を構築しました。そこで、社会人の方とも出会い、企業訪問の企画にも繋がりました。

北田…はじめは「無理だ」と言われても、とにかくやろうと挑戦してみることが大事ですよ。井上…自主活動というのは社会課題を解決する取り組みである一方で、我々自身を磨くツールでもあると思いますね。

最後に、企画を進めていくうちに、使命感のようなものを感じるようになりました。京都市役所や伏見の酒造会社に協力を依頼すると、予想以上に我々への期待が強いことを知りました。

「日本食を世界に発信するにはどうすれば良いか」、「伝統文化の維持にどんな政策が必要か」という問いかけを受けて、改めて公共政策大学院の社会的意義を実感しました。



台湾建設現場訪問

(文責：寺田実穂子)